

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号： 14101
 研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2010 ~ 2012
 課題番号： 22531020
 研究課題名 (和文) 四日市市・内部川沿いの農業地域における言語表現の豊かさの解明と教材開発
 研究課題名 (英文) Investigation of the Rich Linguistic Heritage of the Agricultural Areas along Yokkaichi City's Utsube River, and Development of Teaching Materials
 研究代表者
 余 健 (YO KEN)
 三重大学・教育学部・准教授
 研究者番号： 90345968

研究成果の概要 (和文)：稲作を共通としつつ異なる栽培農作物(お茶・トマト等の野菜・みかん)地帯が内部川沿いに連続する四日市市南部地域(水沢地区・小山田地区・内部地区・河原田地区)に焦点を当て、臨地方言調査を行い、社会言語学的な要因(行政区画の変遷、主要道路、自然環境の違い等)と関連付けることで、各地区の生活語彙表現の豊かさの特徴について明らかにすることを旨とした。方言調査の結果は、ビデオ教材や言語地図教材にし、各当該地域の小学校での授業実践を行い、事後研修会も実施した。又当該地域の住民に調査の結果を報告することで、方言学的な興味を持ってもらったり、地域の問題点(世代間の意思疎通不足等)を共有し、方言を通じた地域の活性化策を模索したりした。

研究成果の概要 (英文)：In addition to the community-wide rice farming, many other agricultural crops are also cultivated in different areas along the Utsube River (for example tea, tomatoes and other vegetables, and mandarin oranges). By focusing on the surrounding region, the southern part of Yokkaichi City (the Suizawa, Oyamada, Utsube, and Kawarada districts), conducting field investigations of the dialects used, and analyzing the results in relation to major sociolinguistic factors (changes across administrative districts and major roads, differences in the natural environment, etc.), the goal was to uncover the richness of the vocabulary used in daily life in each district. The results of the dialect survey were used to create videos and a linguistic map, teaching materials which were then used in classes conducted at elementary schools in each of the applicable areas. A workshop was also held afterward. Also, by reporting the results of the surveys to the residents of each area, interest in the differences between their dialects was sparked, and the areas were able to share the problems they are currently faced with (such as insufficient mutual understanding between different generations), and explore possible solutions for reinvigoration the region through these dialects.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	300,000	90,000	390,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：日本語学
 科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教科外教育（総合的学習、道徳、特別活動）

1. 研究開始当初の背景

(1) 佐藤和之(2002)には以下の指摘がある。方言研究を始めとする文系研究の多くは、研究成果の社会的還元について、これまであまり顧みて来なかった経緯がある。その反省に立ち、今後は自己満足ではない、社会や教育との関係から方言学の研究意義を見出していく必要性を指摘している。この指摘に共感を覚えた筆者は、研究協力者の鈴木幹夫教諭(当時熊野市立入鹿小学校)と共に三重県熊野市での方言調査(2002年～2008年)の結果を国語の作文教育や総合的な学習の時間に結び付け、教育現場に生かすことを試みた(2008年度入鹿小学校にて)。2009年11月13日には7年間の方言調査の結果について、地域住民を対象に結果報告会を開催した(於：熊野市紀和コミュニティーセンター)。

(2) この流れを受けて、2009年度からは三重県内でも行政区画の変遷が激しく、主要な幹線道路(東海道・伊勢街道・巡見街道)が、通過していて、東西の直線距離で約15キロの間に山間部から海岸に近い丘陵地帯まで自然環境の変化に富む四日市市南部の内部川沿いの農業地帯に焦点を当てることにした。

熊野での取り組みを踏まえ、各地区内のより体系的な方言調査とその調査結果を生かした、より発展的で深まりをもった授業実践や地域住民への結果報告会を目指すこととなった。

2. 研究の目的

以下の4点である。

(1) 稲作を共通としつつ異なる栽培農作物(お茶・トマト等の野菜・みかん)地帯が内部川沿いに連続する四日市市南部地域(水沢地区・小山田地区・内部地区・河原田地区)に焦点を当て、臨地方言調査やアンケート調査を行う。

(2) (1)で得られた各地区の方言調査の結果と社会言語学的な要因(行政区画の変遷、主要道路、自然環境の違い等)等とを関連付けることで、各地区の生活語彙表現の豊かさの特徴について明らかにする。

(3) (2)で明らかにした各地域の生活語彙表現の豊かさをビデオ教材や言語地図教材にし、各当該地域の小学校での授業実践を行う。授業には、地域住民にも参加頂き、事後研修会で、教材や授業時の授業者(三重大学生)の発問等の効果や問題点を検討する。

(4) 当該地域の住民に調査の結果を報告することで、方言学的な興味を持ってもらったり、地域の問題点等を(世代間の意思疎通不足等)を共有したりして、方言を通じた地域の活性化策を模索する。

3. 研究の方法

(1) あらかじめ用意した調査票に基づき、各地域の小学校や市民会館にて面接調査やアンケート調査を実施した。面接調査においては、全項目をデジタル録音した。なお、各地区での本調査の前には予備調査(高年層2,3名を対象)を実施し、全地域共通項目45項目は維持しながら、各地区に特徴的な調査項目の追加や削除を行い、調査の充実を図った。

(2) 水沢・小山田両地区の本調査では、後の学生による授業実践に直結しやすい項目(お手玉やめんこ等の遊びの語彙や南東の風の呼び名等の天候関係の語彙)のみビデオ収録したが、内部・小山田・河原田地区調査では全項目をビデオ収録した。

(3) 調査項目は以下①から⑤の生活語彙である。①遊びに関する語彙②農業に関する語彙③動作に関する語彙④性向語彙(「ずるい」や「うらやましい」等の言い方)⑤動植物の語彙(「もぐら」や「いたどり」等の呼び名)

(4) 面接調査の調査対象は、水沢地区22名・小山田地区24名・内部地区23名・河原田地区12名の60代以上の高年層である。原則的に各地区内の各町から2名(男女各1名)に調査を行った(2009年～2012年)。

また、じゃんけん等の遊びの項目に焦点を絞ったアンケート調査は、2010年に水沢小の保護者32名(20代～40代)、小山田小の保護者178名(30代～70代)に実施した(2011年)。水沢地区4名の保護者(30代～40代)、小山田地区の保護者8名(全員40代)水沢小学校5年生36名と小山田小学校10名からは、遊びの語彙の呼び名と実際の遊びの模様をビデオに収録した(2010年)。上記のアンケート調査とビデオ収録調査の中心的な内容は、余(2011)にまとめた(5節の雑誌論文参照)。

(5) 授業実践について

(4)までのプロセスで得られた成果を参加した三重大学生が、グループワークを通じて、ビデオ教材や音声教材、地図教材に編集・教材化し、各地域の小学校5,6年生を対象とした指導案を作成した。坂正春先生と水沢小・小山田小・内部小・河原田小の各校長先生から、その指導案に対するご指導をいただ

き、指導案を修正後、4 節の(2)のとおり、三重大学生による授業を実施し、その後の事後研修会では、三重県教育委員会指導課の先生や各小学校の先生方、地域の方々からもご指導をいただいた。

上記の各方言調査や小学校での授業実践、科研費報告書(5 節その他①参照)の各項目の執筆には、余担当授業(日本語学演習 語史・方言 I、II)の三重大学教育学研究科の大学院生と教育学部の受講生が参加した。

4. 研究成果

(1) 方言語彙調査から得られた成果

①栽培作物が異なる連続した農業地区間に対応している項目

○お茶・野菜・みかん作り関連の語彙

全国 3 位の茶の生産量を誇る三重県内でも、鈴鹿山麓の扇状地である水沢地区や小山田地区の水沢地区よりの地域(小山町から和無田町)までが、その中心地である。

この地域では 5 月の連休明けに一番茶を摘み、その後 6 月の二番茶を摘むまでの間の時期に、笹やすすき、菜種のカス等の「オレイゴエ(お礼肥)ヲオク」との回答が多く確認された。

なお、小山田地区の中でも標高がより低くなる内部地区側寄りの地域(山田町や鹿間町)では、茶ではなく、野菜やさつまいもを栽培する農家が増え、「オイゴエ(追い肥)」という使用語形が多く確認されるが、上記茶栽培地区の「オレイゴエ(お礼肥)」とは、似て非なる語形で、語源が異なるものと考えられる。

また、新芽が 2、3 枚出た頃にコモ(わら等の遮光幕)を 1 週間位被せ、渋みを取り甘味や香りを出すかぶせ茶の生産は三重県が全国 1 位である。水沢・小山田の両地区ともに現在ではビニールナイロン製のものを被せるが、水沢地区では、かつてのわら製の名残である「コモ」を現在も使用する人が多い(22 人中 18 人)。

対して、小山田地区でのコモの利用者は 24 人中 2 人のみで、「コモはわら製限定」や現在のビニールナイロン製の製品名「クレモナ」系や「カンレンチャ」(正式製品名称：カンレイシャ)系の使用者が多く、水沢地区から小山田地区までの連続する隣り合ったお茶の生産地でも、「コモ」等の呼び名の使用の有無に地域差が確認された。この点については、水沢地区と小山田地区との境界には南北に巡見街道(306 号線)が走っていることとの関連も注目される。

さらに、「コモ」(わらで編んだ網目の荒いもの)は、みかん栽培が盛んな河原田地区でも、冬季の西風や北風からの防寒用にみかんに被せるものとして使用された(12 人中 10 人に確認)。河原田地区のあるみかん農家によ

ると、みかんの木の周囲にお茶の木を植えると土壌が安定するとのことであった。「コモ」という化学肥料に比べると環境に優しいことを媒介として、お茶とみかんの意外な関連も確認できた。

○稲作関連の語彙

質問:「田んぼの一角にある、水を温めるために冷たい水を迂回させる水路のことを何と呼びますか」

この質問項目に対しては、稲作を共通の作物とする本調査地域間(水沢・小山田・内部・河原田)において、内部川上流域か、下流域か、つまり標高の差異(川の水の温度差)が言語使用に直接的に影響している点を確認された。鈴鹿山脈の麓で内部川の最も上流に位置する水沢地区や小山田地区の中でも内部川の支流(足見川や鎌谷川)が流れる比較的水の冷たい地域では、「ヨゲ」や「トユ」の田んぼへの迂回水路名が多く確認された。

対して、内部川の下流域の内部地区内では、内部川の支流(足見川や鎌谷川)が内部川に合流する内部地区北部の波木町や貝家町で「ユミゾ」や「トユ」という田んぼへの迂回水路名が確認された一方で、その他の内部地区では、「水が温かいため迂回水路必要なし」の回答が多く確認された。

さらに、内部川の最も下流域の河原田地区では、「水を温める迂回水路必要なし」のコメントが内部地区より更に多く確認されるのに対応して、上記「ヨゲ」や「ユミゾ」「トユ」のような内部川上流域中心に川の水の冷たい地域で確認された田んぼへの固有の迂回水路名は確認されなかった(全員「スイロ」か「ミゾ」を回答)。なお、「トユ」や「ユミゾ」の「ユ」は、「湯」ではなく「水」を指す。

②生活語彙

○遊びの語彙「お手玉」

約 100 項目の普段の生活に密着した調査項目(2 節(3)参照)の中でも、社会言語学的要因(行政区画の変遷、主要道路等)や言語学的要因(長い語形から短い語形への少エネ的变化)と直結した回答が多く確認された「お手玉袋」の呼び名に焦点を当て、以下で報告する。

まず、今回の調査地の中で最も西側に位置する水沢地区では、お手玉袋を意味する「ヒトツイ(hitotsui)」の回答が 22 人中 15 人と最も多く確認された。また、約 50 年前に高年層対象に調査が行われた「日本言語地図第 3 集」(国立国語研究所 1968)や岸江(1978)のでは回答が確認されない「ヒトツキ(hitotsuki)」の使用が、2 名確認されたので、この語の語末音節の子音[k]が脱落して、「ヒトツイ(hitotsui)」が生まれた可能性がある。

つぎに、水沢地区の東隣の小山田地区では、「オツ」系の語形が24人中8人に確認された。この「オツ(otsu)」は、水沢地区で多数確認されたヒトツイ(hitotsui)の両端の下線部[hit]と[i]が脱落して生まれたものと考えられる。つまり、水沢から小山田間においては、ことばを使用している内に長い語形から短い語形へと変化する発音時の省エネ化の観点から、ヒトツキ(hitotsuki)→ヒトツイ(hitotsui)→オツ(otsu)という変化のプロセスを想定し得る。

さらに、小山田地区の東隣の内部地区、河原田地区では、「オテダマ」の語形が多数派の使用語形であった(内部:23人中21人・河原田:12人中全員)。この点については、「日本語地図第3集」(1968)では「オテダマ」系の語形が関東地方から福井・岐阜・愛知の中部地方にかけて多く確認されるが、四日市市周辺では確認されないため、東海道や伊勢街道経由で愛知方面から河原田地区や内部地区にこの50年程の間に伝播してきたものと考えられる。

一方、お手玉袋を意味する「サイコ」や「サイコロ」が、小山田地区南部の和無田・鹿間、内部地区南部の南小松の行政区画上の所属としては1950年代まで鈴鹿郡であった地域に特に集中的に確認された。

江畑(1995)では、「サイキョ」や「サイコロ」が鈴鹿で多く使用される語形とされているが、岸江(1978)の調査では、小山田地区内で「サイキョ(コ)」や「サイコロ」の使用が確認されない。今回の調査では他に小山田地区北部の小山町でも、「サイキョ」が確認されたことから、岸江(1978)の調査時点から約40年の間で、巡見街道(306号線)沿いに、「サイキョ(コ)」や「サイコロ」の語形の使用域が鈴鹿から小山田地区内に北上した可能性を指摘できよう。

(2)4節(1)の成果を生かした授業実践について

以下の①～④のとおり、三重大学教育学部生による授業を当該の小学校で実施し、その都度、先生方や地域住民の方からご指導を頂いた。授業を受けてもらった子供の印象としては、地域のことばに対して非常に関心を持っており、時に地域差の要因等について大学生レベルにも匹敵する指摘が出された時には驚かされた。授業者の三重大学生からは、この一連の取り組みを通じて、事前実習になったり、今後教壇に立つ上で、総合的な学習等の授業を実施する上でのヒントにもなっ

たりした、との感想を受けた。

なお、授業時の問題点と課題(教師が説明する内容と子供に考えさせる内容とを明確に分けて進める等)については、次年度の授業に生かすよう努めてきている。

①2010年2月と2011年2月に水沢小学校で5年生各1クラスを対象に授業(題材:組分けじゃんけんの言い方の世代差・地域差から見えてくること)と授業後の事後研修会を実施。

②2011年2月に小山田小学校で6年生1クラスを対象に授業(題材:「へび」の言い方の地域差や語源・アクセント)と授業後の事後研修会を実施。

③2012年2月に内部小学校で5年生3クラスを対象(題材:「とうもろこし」や「彼岸花」等の高年層の言い方を通じて方言の大切さについて考える、他2つの題材)に授業と授業後の事後研修会を実施。

④2013年2月に河原田小学校で5年生2クラスを対象に授業(題材:お手玉やめんこの四日市市南部の高年層の言い方の違いを通じて河原田地区のことばの特徴を考える)と授業後の事後研修会を実施。

(3)4節(1)の成果の地域への還元について

5節の〔その他〕の欄に挙げたとおり、各地で、地域住民の方を対象に方言調査報告会を実施した。4節で挙げた研究成果等に加えて、肩車やじゃんけんの言い方等の語源や語の変化のプロセスとその背景にある要因について、できる限り平易な言葉を用いて説明するように努めた。

参加者の方には概ね興味を持っていただけたものと考えているが、報告会の終了前には、「昔と今の子どもの遊びの違い」や「地域内での世代間の意思疎通不足」、「子どもの学校教育における本来的な在り方」等にも話が発展し、それらに対する具体的な解決策を見出すまでには至らなかったが、それらの問題に今後も向き合っていくことの大切さを方言調査や授業実践を通じて、地域住民のみな

さんと共有できたことは意義深いものがあった、と考えている。

今後もこの一連の活動(方言調査の実施→調査結果の教材化→授業実践、地域住民への結果報告)を特に三重県内の各小学校の先生方や児童、地域の方々、三重大学の学生と共に継続して取り組んでいきたい。

「方言」の単元が削除される小学校の教科書が増えている中で、各地域の消滅する前段階の伝統的で多様、且つ豊かな表現力を持つ方言形(4節(1)参照)を記述・分析・教材化し、授業で見直していく取り組みは、子供が地域を見直したり、子供自身の健全なアイデンティティを確立したりしていく上でも、今後益々その重要性を増してくるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

余 健 (「方言調査の結果を授業に活かす—四日市市水沢地区に焦点を当てて—」単著 『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』2011年・第31号, 43-51, 査読無し)

[その他]

- ①報告者(余 健)、報告標題(四日市市河原田地区の方言調査の結果報告—水沢地区～河原田地区間の特徴を踏まえて—)、報告会名(河原田地区方言調査結果報告会)、報告日(2013年3月16日)、報告場所(四日市市河原田地区市民センター)
- ②2010年度～2012年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
余 健(編)『四日市市・内部川沿いの農業地域における言語表現の豊かさの解明と教材開発』2013年, 1-104, 三重大学教育学部, 伊藤印刷株式会社(津市大門), 査読無し
- ③報告者(余 健)、報告標題(四日市市水沢地区の方言調査の結果—小山田地区と比較して—)、報告会名(水沢地区方言調査結果報告会)、報告日(2011年3月14日)、報告場所(四日市市小山田地区市民センター)

④報告者(余 健)、報告標題(四日市市小山田地区の方言調査の結果—水沢地区と比較して—)、報告会名(小山田地区方言調査結果報告会)、報告日(2010年12月10日)、報告場所(四日市市立水沢小学校)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

余 健 (YO KEN)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：90345968

(2) 研究協力者

坂 正春 (BAN MASAHARU)

四日市市立水沢小学校・元校長